序

一・本研究の立場、目的と方法

古丁（こてい）は、一九三二年から四五年まで日本支配下に置かれた中国東北地方、いわゆる「満洲国」における「満人」、すなわち、中国人の中で最も有名な作家であった。その作品は日本語に翻訳され、日本でも出版されており、日本国内でもかなり知られていた。しかし、今日、中国でも日本でも古丁とその作品はほとんど知られていない。なぜなら、彼が活躍した時代は両国共に忌まわしいものとされてきたからである。では、なぜ、筆者は、この歴史の埃にまみれたような人物を掘り起こし、今さら光を当てようとするのか。それにはいくつかの理由がある。

日本でも中国でも、それぞれに近代史が書かれている。が、それはいずれも国家の視点によるもので民衆の目からのものではない。特に、「満洲国」の三千万人ともいわれる民衆の生活はいかなるものだったのか、彼らはいかなることを考えていたのか。それについて、日本でも中国でも細部にわたる研究は、ほとんど行われていない。一九三七年七月に日中全面戦争が始まり、四一年一二月には日本は対米英戦争に突入する。日本を後ろ盾とする「満洲国」の政策は、実は、次から次へと変わって行った。それに対して満洲の民衆はどのように反応したのか。これを明らかにしていかなくてはならない。それが本研究の第一の目的である。その一つの手がかりとして「満洲国」文壇の中心人物であった古丁を取り上げ、彼の活動の全容を明らかにしていく。

今日、ポストコロニアル論が盛んに展開されているが、肝心の植民地期の状況は地域ごとにまちまちであり、その違いを踏まえなくてはならないという指摘がなされて久しい。「満洲国」については、政治・経済などの面においては、数多くの成果が上げられてきたが、文化面の研究については、まだ資料の掘り起こしの段階にとどまっているともいわれる[1]。それゆえ、本書では、古丁を取り巻く状況を明らかにし、それによって「満洲国」の文化の実態に少しでも迫りたい。それが第二の研究目的である。

従来の日本支配期についての人物研究は、彼または彼女が親日派であるか、抗日派であるか、と単純に二分する傾向が続いてきた。しかし、たとえ「親日」だとしても、その人物が日本を百パーセント受け入れたのだろうか。そうでなければ、日本の何処に親しみを持ち、何処に反対したのか、を冷静に見極める必要がある。

そのような分析がなされない限り、評価はただ感情的な反発や共感の間を揺れ続けることになる。それでは今後の日中相互理解には役立たない。相手の文化との違いを理解し、それを踏まえた上で相手を尊重し交流する、これこそ東アジア地域のネットワーク作りの基本であり、それに役立つ研究こそが、今日必要だと考

える。そのためには、それぞれの時期における人びとの思想・信条に分け入った研究が不可欠である。

古丁は、一九一四年九月二九日に吉林省長春県に生まれた。本名、徐長吉。満鉄の長春公学堂、南満中学堂で小中学校の教育を受け、瀋陽にある東北大学に入学するが、一年後の満洲事変の際に北平（北京）へ亡命し、三二年に北京大学に再入学している。翌年、中国左翼作家聯盟北方部に入り、徐突微の名で、組織部長として活動するが、まもなく逮捕され、故郷の長春に戻る。日本支配下の「満洲国」の官吏を務めながら、古丁などの筆名で文学活動を行い、名声を得る。四一年五月には公職を辞め、一〇月に出版社兼書店である、株式会社芸文書房を設立し、社長として執筆と出版に専念するようになる。この間、日本の「聖戦」完遂に協力する言動も行っている。

日本の敗戦後には、東北中ソ友好協会の秘書となり、その傍ら文学活動を行った。新中国の成立後、五七年からの反右派運動では極右分子と見なされ、歴史反革命罪同然で、翌年投獄される。そして後、六四年、遼寧省鉄嶺監獄の中で死去する。

このように記すと、古丁の一生は、中国近代の大きな歴史的事件に次から次へと巻き込まれ、その立場は変転につぐ変転を重ねたように見える。ところが、実際のところ、この人物について、これまで知られていることはごくわずかに過ぎない。書き残した作品すら全容が明らかにされないまま、その評価をめぐって、否定と肯定の両極端の論議がなされてきた。彼の生涯と著作が掘り起こされ、その思想の変転の内実が明らかになるなら、中国近代史の一コマに新しい見方が生まれるといっても過言ではない。

古丁についての先行研究は、「愛国抗日作家」であるか、政治的な立場が「反動的」か、という二分法の中で堂々めぐりしてきたと言わざるを得ない。なぜなら、「愛国抗日」論者も、「政治的反動」論者も、互いに強いイデオロギーを持ち、互いを説得することができないからである。それゆえ、本研究ではそのような回路に入り込まないようにした。言い換えれば、本研究は、愛国抗日作家か、政治反動分子か、という問題を解決するために行うものではない。古丁のような作家は、そのような二分法で割り切ることができないからである。

本研究では、古丁という人物が、日本支配下の「満洲国」で、どのように考え、何を実現しようとしたのか、それをできるかぎり明らかにしたい。これが第三番目の目的である。それを通して、「満洲国」における中国人民衆の生活の一端が、特に文化状況が明らかになっていくだろう。本研究の目的の第一、第二、第三が、互いに補い合う関係にあることは言うまでもない。これらの目的に従い、本研究では、考察の焦点を、古丁の生涯のうち、北平左翼作家聯盟時代から「満洲国」崩壊の時期までに置く。生い

立ちと戦後については、ごく簡単に触れる程度にとどめる。

二　古丁に関する従来の研究と、その問題点

考察に先立ち、古丁に関するこれまでの中国と日本での研究の概要を紹介し、その問題点を指摘しておきたい。

二－一　中国での研究

中国文学史の中で、「満洲国」時代は東北淪陥期とされ、長い間その文学は忌まわしいものと見なされ、無視されてきた。近年、淪陥区文学研究の気運が高まり、その研究に取り組む人も現れているが、古丁という、「満洲国」では最も有名ながら、最も複雑に見える人物を積極的に扱う人はまだ少ない。

その研究成果の中で特筆に値するのは、吉林省社会科学院文学研究所の李春燕研究員が編集し、一九九五年に春風文芸出版社（瀋陽）より刊行された『古丁作品選』である。その中には単行本『一知半解集』『譚』『奮飛』『竹林』『平沙』、および翻訳作品「魯迅著書解題」が収録されている。これは、東北淪陥期文学研究史の中で初めて刊行された作家集で、この研究分野における新しい時代の到来を示している。

その編集者、李春燕は、『古丁作品選』に付した論文「東北淪陥時期文学の諸問題について古丁を評する」（就东北沦陷时期文学的几个问题评古丁）の中で、「満洲国」時代の文学が中国近代文学の一部かどうかという問題を提起し、東北淪陥期文学の性格を定義づけようとした。それは「満洲国」時代の文学が従来の中国文学史の中で無視されてきたことに対する提言であり、その問題意識は中国近代文学研究史に大きな意味を持つものと思われる。

李春燕はそこで、「日本統治という特殊な時期を認識すると同時に、文学自体の複雑性も視野に入れる。この特殊性と複雑性を結びつけて、個々の作家を具体的に考察するなら、文学の表面に惑わされず、その本質を見定めることができるかもしれない」（看到日伪统治时期历史的特殊性，同时也要看到文学自身的复杂性，把特殊性和复杂性结合起来，然后运用到具体作家身上，那可能就不会被表面上的文学所迷惑，而能透过表面看其本质了）[2]と、研究方法を示しつつ、「芸文志派」の創作傾向は、健康的で積極的で、抗日愛国的だと結論づけている。個々人については、「深くて計略的（あるいは面従腹背）な古丁、完璧な芸術を追求する小松、郷土色が濃い疑遅、古を持って今を喩える外文、鬼才を放つ爵青」（志谋深算（或者叫面从腹背）的古丁，追求完美艺术的小松，乡土气息浓厚的疑迟，以古喻今的外文，具有鬼才的爵青）[3]と評している。

古丁の態度が「面従腹背」だと評したのは、李春燕が初めてで

はない。「彼（古丁）の『面従腹背』は、日本のインテリゲンチャに見られた『偽装転向』とは本質的に異なっている」[4]と、尾崎秀樹が『旧植民地文学の研究』（勁草書房、一九七一）ですでに言明している。「面従腹背」とは、表面上は従うが心の中では反発することである。古丁は表面上は「満洲国」や日本に協力しているように見えても、実は、日本のやっていることに反対していた、と取ってよい。「面従腹背」が古丁のイメージとして定着しているように見えるが、果たしてそうであろうか。

古丁が一九四四年から四五年にかけて発表した「新生」（四四年二月）、「下郷」（四四年九月）、「山海外経」（四五年七月）は、それぞれ「民族協和」「勤労増産」「米英撃滅」をテーマにした作品である。これらは、『古丁作品選』には収録されていない。つまり、李春燕は、この三篇を外して古丁を語っていることになり、その点が、李春燕による古丁研究の欠落と言える。

『古丁作品選』には、馮為群「事に即して事を論じることについて—鉄峰への返事」（関於就事論事答鉄峰）という評論が収録されている。これは、鉄峰が論文「古丁の政治立場と文学功績」（古丁的政治立場与文学功績、一九九三）の中で、古丁には、文学上の功績はあるが、大東亜文学者大会への参加や「親邦日本」という発言などから見れば、日本に追随しており、その政治的な立場は反動的だ[5]、という見解を示したことに対して、馮為群が李春燕に似た見方を示したものである。だが、果たして古丁の態度を「面従腹背」と見なすことによって、鉄峰のような古丁の政治的立場と文学的立場を分けて考える見方を完全に覆すことができるだろうか。「民族協和」「勤労増産」「米英撃滅」をテーマとする作品群を、どのように評価したらよいのだろう。

二-二　日本での研究

日本では、尾崎秀樹が、いち早く古丁について言及したが、その後、中国文学の研究者、岡田英樹が、八〇年代から一人でこつこつと満洲文学の研究を行い、古丁についても考察を重ねてきている。その先見性と堅忍性は尊敬に値する。岡田はまた、古丁の左翼時代の革命仲間である端木蕻良や、総務庁時代の同僚、そして古丁の息子で清史研究者の徐徹など、古丁の親族や知人と交流し、文献に現れない古丁に関する事実を引き出してきた。その岡田は、古丁について、次のように述べている。

> たしかに古丁は、満洲国文芸政策を立案し、実施に移す先頭に立っていた。その発言の中から国策追随、日本協力の痕跡をひろいあげることはたやすい。しかし、上記実践啓蒙者としての視点から、かれの発言と行動をながめてみると、す

こし別のものがみえてくる。[6]

「すこし別のもの」とは何であろうか。それについて岡田は明言を避けており、「面従腹背」という見方とどのように違うのかは不明である。

以上見てきたことから、これまでの先行研究についての問題点は、古丁が「満洲国」の政策に対して、「面従腹背」を貫いたかどうか、というところに絞られるようである。それは、侵略戦争に乗り出した日本帝国主義に反対したか、協力したか、という問題設定によって発せられるものである。しかし、その問題意識によっては、結果から古丁の思想を割り出そうとする態度に陥ってしまうように思われる。そのような態度は、日本帝国主義の罪悪の摘発とその清算や、戦後処理の問題などには意味を持つかもしれないが、日本植民地としての「満洲国」の現実の中で生きていかなければならなかった文化人であり、作家であった古丁の思想と行動の実態を分析・考察するには、ほとんど役に立たないと考えられる。

古丁も、日本帝国主義に反対するか協力するか、を考えたであろう。だが、それは「満洲国」の植民地文化政策にどのように対応し、いかにして生きていくかが、絶えず問われる状況の中でのことである。それゆえ、本研究では、まず古丁がいったいどのような行動を取り、なぜそうしたのかを明らかにし、その上で、古丁の行動がもたらした結果を客観的に検討する姿勢を取りたい。

三　調査概要と本書の構成

「満洲国」時代の古丁の活動の全容を、それを取り巻く情勢と共に明らかにすることが本書の大きな目的である。その時期の古丁は、作家であると同時に翻訳者、また出版業者でもあった。したがって、古丁の創作・翻訳・出版活動のそれぞれについて、周辺資料をできる限り調査収集することが不可欠の課題である。中国の東北地方および北京などで現地踏査、関係者インタビュー、文献資料の調査を重ねたことが本研究の土台を成している。ここに、成果の概要をまとめておく。

三－一　調査概要

現地踏査は筆者にとっては大きな意味を持つものだった。人はそれぞれに「満洲国」のイメージを持っているが、それは各人が生きる文化環境の中で作り上げられたもので、実際との差があることは否めない。少なくとも、当時の現実を全く知らない筆者に

とってはそうであった。植民地支配は侵略性と同時に近代性の側面を持つといわれる。侵略の実態は時代と共に消えて行くが、近代性の跡は建築物などと共に残る。大連・長春・瀋陽・哈爾濱に残された「満洲国」政府や関東軍関係の建築物をはじめ、満鉄附属地街等の踏査は、筆者の満洲の近代化に対する理解、特に、異民族支配下で近代化の進む環境に生きていた人々が何を感じ、何を考えていたかについて、理解を深める一助となった。

インタビューの対象は、古丁に関係する人物と研究者とに分けられる。二〇〇七年八月には、古丁の息子であり、元遼寧古籍出版社社長を務めた、清史研究者の徐徹氏の他、古丁の酒友で、元「芸文志派」の詩人・翻訳者であり、満洲映画株式会社の監督も務めた李民（杜白雨）氏や、元「文選派」作家で、詩人・書道家の李正中氏とその妻の元作家朱媞氏を訪問した。二〇〇九年九月には、再び徐徹氏と、古丁の実の妹で、元東北大学職員の徐青氏にインタビューした。これらの証言を、本書では補助材料として用いている。

満洲研究者としては、元東北師範大学教授の呂元明氏、『東北現代文学大系一九一九～一九四九』（瀋陽出版社、一九九六）の編集者、張毓茂氏と李春燕氏などを訪問し、研究の貴重な手がかりを得た。ここにこれらの方々に対して深い謝意を記しておきたい。

また、文献資料の調査はもちろん、本研究の成否に関わる最も重要なものである。筆者は、中国東北地方をはじめ、北京、上海の各図書館や古書店を訪れ、古丁および「満洲国」の文学・文化に関する資料を広範に収集した。

第一に、北平（北京）時代の古丁（この時期の筆名としては突微を使用）の詩作「貴重な経験—天津恒源紗廠女工の闘い」（宝貴的経験—天津恒源紗廠工人的闘争、一九三三）を、また、翻訳作品としては、朴能「味方」（你們不是日本人，是兄弟、一九三三）、岩藤雪夫「紙幣乾燥室の女工」（紙幣乾燥部的女工、一九三三）、古川荘一郎（蔵原惟人）の論文「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争」（在藝術理論中的列寧主義的鬥爭、一九三三）を確認した。いずれもこれまで論じられていないものばかりである。

第二に、『古丁作品選』に収録された全作品の初出、原本はもちろん、収録されていない小説「新生」（一九四四）、「下郷」（一九四四）、そして、古丁の思想を言及する際には欠かせない散文詩集『浮沈』（一九三九）も確認した。その他に、各雑誌や新聞に散在するエッセイや評論も数多く見つけることができた。中には、従来言及されてこなかったものが多い。

古丁の主な作品発表の場であった雑誌類では、『明明』（一九三七～三八、全十八冊のうち十二冊）、芸文志事務会編『藝文志』（以下、事務会『藝文志』と略す。一九三九～四〇、全三冊）、満洲芸文聯盟機関誌『藝文志』（以下、聯盟『藝文志』と略す。一九四三～四四、全十二冊）を集めた。また関連する雑誌では、『麒

麟』（一九四一～四五）、『電影画報』（一九三七～四五、後に『満洲映画』）、『満洲国語』（一九四〇～四一）、『書影』（一九四四）の大部分を確認した。新聞については、『大同報』『盛京時報』などの中国語紙を調査した。また、「芸文志派」の小松・百霊・外文・疑遅・爵青らをはじめ、「文選派」やその他の同時代作家、山丁・王秋蛍・梅娘・劉漢・楊絮などの著作も数多く確認した。

「満洲国」での十四年間、古丁は精力的に翻訳を行っているが、テキストはほとんど知られておらず、それらについての詳しい考察も見当たらない。一方、筆者独自の調査により、いずれも単行本として刊行された、石川啄木『悲しき玩具』（一九四三）、中島健蔵『学窓と社会』（一九四一）、大川周明『米英東亜侵略史』（一九四二）等を掘り起こし、書名しか知らなかった夏目漱石の長編『こゝろ』の翻訳である『心』（一九三九）も見つけることができた。単行本の他に、芸文志事務会編『譯叢』（一九四一）、梁孟庚（山丁）編『近代世界詩選』（一九四一）、島崎藤村著・杜白雨訳『春』（一九四二）、田兵編・翻訳特集雑誌『作風』（一九四〇）等も確認した。

さらに、古丁が社長を務めた出版社兼書店の株式会社芸文書房も、彼の活動の重要な要素である。その性格を明らかにするため、筆者は芸文書房から出版された資料を丹念に調べた。そのすべての確認には至っていないが、見出し得た資料に限っても芸文書房の性格は十分うかがえる。また、芸文書房の性格を特定するために、同時期の他の出版社、例えば、政府系の満洲図書株式会社や、「満人」民間系の益智書店などの出版物の調査も行った。

しかし、古丁関係の資料をすべて調べ上げ、集め切ったとは、とても言えない。資料の全容が、いったいどれほどに及ぶかさえわからない。新聞・雑誌・単行本いずれも全冊そろう形で残っていないからである。調査にはさらに年月をかけて取り組む必要があり、本研究は、ほぼ概要をつかんだと判断した時点でまとめたものである。その意味では、いわば経過報告であることを了解されたい。

三－二　本書の構成

より客観的、全体的に古丁像を捉えるために、本書では、第一部「古丁の生涯」、第二部「翻訳活動」、第三部「創作活動」、第四部「編集出版活動」に分けて、考察を進める。

まず、第一部「古丁の生涯」では、古丁の生涯のあらましを描いてみたい。古丁の思想内容を直接に示すものに、評論・随筆類がある。これらを丁寧に見ていけば、古丁の思想をおおよそつかむことができる。また知人たちの回想に現れる彼の思想も参照する。

ただし、古丁の評論・随筆のうち、「満洲国」時代のものは、日

本が実質的に支配する「満洲国」政府による言論統制下で書かれたものである。また、その政策もかなり変化しており、その変化には十分留意する必要がある。また評論・随筆は、詩や小説よりも韜晦することが困難であり、その文章から内心を読み解くことには限界があるだろう。

翻訳は、古丁が北京大学の学生時代から手がけ、左翼運動に入るきっかけにもなり、ほぼ生涯にわたって取り組んだものである。創作の代わりに行われた時期もある。翻訳作品には、古丁の外国文学に対する見方、テキストの選択やその解釈に関する指向、そして、中国や「満洲国」の実状に合わせた表現方法が如実にうかがわれる。それゆえ、第一部ではつかみきれない古丁の思想、特に文学観を探るために、第二部「翻訳活動」では、翻訳の実態について詳細に分析する。

創作には、作家としての古丁の個性や、その思想・感情が現れているのは言うまでもない。第三部ではこれらを「創作活動」として分析し、考察する。

第四部では、雑誌の刊行と芸文書房の活動について考察する。古丁が直接関わったのは、『明明』と二つの『藝文志』である。これらの雑誌の創刊と終刊は、「満洲国」の事情と密接に関連しており、社会状況に対する古丁の反応を語るものともなっている。古丁を中心としたグループは、特に『明明』期には、雑誌を足場に他の文学グループと批判の応酬を繰り返しており、これを考察することによって、古丁の立場と共に、「満洲国」の「満人」文壇全体の動向が見えてくるであろう。さらに、芸文書房の出版計画や刊行された書籍の検証によって、古丁らの文学・出版活動の目的や意義を明らかにする。

そして、第五部「結び」で、全体を総合し、結論とする。各部に、食い違う傾向が見られた場合など、ここで解決するつもりである。

なお末尾には、附録資料編として、①調査資料一覧 ②第四部の参考資料として雑誌の目次（『明明』、芸文志事務会関係の出版物、聯盟『藝文志』）、③古丁作品一覧、④古丁年譜を付す。

本研究は、総合研究大学院大学イニシアティヴ事業、およびサントリー財団から資金助成を受けた。深く感謝したい。

注

1 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社新書、二〇〇五年。
2 李春燕編『古丁作品選』春風出版社、一九九五年、六〇四頁。
3 同前。
4 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』勁草書房、一九七一年、九五頁。
5 鉄峰「古丁的政治立場与文学功績」、『北方論叢』一九九三年第五期を参照。
6 岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版、二〇〇〇年、八一～八二頁。